０８／０２／１７　　礼拝メッセージ　　岡田大輔　副牧師

主　　題：交渉の余地なし２
聖書箇所：申命記　１０章１２－１３節

　神は私たちにすばらしい賜物をたくさん与えてくださいました。そのすばらしい賜物のひとつは、私たちがもっている「忘れる能力」です。神は私たちに物事を忘れることができるという、そのような能力を授けてくださいました。なぜ、このような言い方をするのかというと、もし皆さんが、例えば１０年前に起こった様々な出来事、２０年前に起こった様々な出来事、３０年、４０年、５０年前に起こった様々な出来事を、まるで今日、今朝、起こったことのようにはっきりと覚えているとするなら、私たちはこの人生を生きて行くことができません。そう思われませんか？あの時に起こったあの痛みをその時と同じように今も経験しているとするなら、その痛みに押しつぶされて、先に進むその意欲を失ってしまうでしょう。きっと皆さんの人生にも様々な悲しい出来事が起こったことでしょう。その時の悲しみを忘れることはないかもしれませんが、けれども、今とその悲しいことが起こった瞬間とでは、明らかに悲しみの大きさというのは違うものになっています。なぜなら、私たちはそのような事柄を後ろに置いて行くことができる者として、神が造ってくださったからです。それ故に、私たちが過去に起こった良いことであれ、悪いことであれ、そのような事柄をその時と同じ様に１００％全く変わらずに覚えていることがないことは、神の恵みのゆえにもたらされたすばらしい能力だろうと思うのです。けれども、人間の持っている悲しい問題は、私たちがこの神が与えてくださった忘れることができるというすばらしい能力を、実は忘れてはいけないことにも発揮することです。私たちの人生には忘れてはいけないことがあるのです。
　けれども、罪を犯し神の前に正しく生きることができないそのような私たち人間は、神が与えてくださっている忘れる能力を、実に見事に忘れてはいけないことに発揮するのです。それゆえに、例えば、ご主人の皆さん、結婚記念日を忘れていませんか？何月何日だったか思い出せますか？子どもさんの誕生日、忘れることがないと言われるかもしれませんが、もしかすると、忘れている方がおられるかもしれません。さっきお会いした人、一度会ってしっかり名前を覚えたはずなのに思い出せません。今週しなければならない大切な仕事や責任、うっかり忘れることはありませんか？後になって気づく、そんなことがあるのです。どうですか？先週の日曜日のメッセージ、皆さん覚えていますか？どの書からメッセージされましたか？マタイの福音書７章１３－１４節、どの様な内容だったか覚えておられますか？皆さん、暗唱されたはずのみことばを今も覚えておられますか？神が皆さんに求めておられる命令、覚えていますか？
　確かに、忘れることができることは感謝です。けれども、忘れてはならないことに私たちが忘れる能力を発揮するなら、そこには問題があるのです。問題があると思いながら、でも、実際にそのようなことは起こります。願わくは、今日ここで聞くメッセージを来週まで覚えておいて欲しいのですが、忘れる可能性もあるのです。実に、私たちは重要なことを忘れることに長けています。私は今朝も危うく今日のメッセージのノートを持って出るのを忘れるところでした。朝、上のオフイスで印刷をして下に出したはずなのですが、それを取って来るのを忘れてここに入ってきたのです。後で気づいたのですが、そういう愚かなことを私たちはするのです。
　聖書には実に、６４００を超える命令があります。皆さん覚えていますか？覚えられると思いますか？その数を聞いただけで無理だと思われますか？その１割、６００でも覚えていることは難しいですね。でも、これらの命令は私たちが別に忘れても構わないと捉えても良いものではないことを私たちはよく分かっているはずです。私たちには問題があります。神は６４００を超える命令を私たちにしているのです。その命令は非常に重要で、私たちは覚えておかなければいけないのですが、私たちの毎日の生活を見る限り、私たちは忘却に長けた人物なのです。忘れることが得意なのです。いったい、どうしたらよいのでしょうか？私たちの神は非常にあわれみ深く恵みに満ちたお方です。だから、６４００以上あるその命令を、私たちに対して、忘れることがないその数にまとめてくださったのです。しかも、なかなか忘れることができないような概念を持って。それが私たちが見ている申命記１０章に記されていることばです。神は６４００の命令をわずか五つのことばでまとめられました。私たちが理解することができ、忘れることがないように、いったい、どうすれば私たちが神を喜ばせて生きることができるかという、その根幹的な原則を神は私たちに与えてくださっているのです。
　前回、皆さんとともにこの箇所を学んだときには最初の部分を見ました。そこでも言ったように、私たちはこの申命記１０：１２－１３を通して、神が私たちに求めておられる非常に大切な原則を見て行きます。それをもって、私たちがそれを理解し、忘れることなく、それをしっかり実践して行くことができるように、私たちがそのような歩みをするなら、神が喜んでくださることを私たちが知っているが

ゆえに、そのことを願いつつ、この箇所の続きを見て行きたいと思います。モーセはイスラエルの民にこのように語りました。申命記１０：１２－１３**「:12 イスラエルよ。今、あなたの神、主が、あなたに求めておられることは何か。それは、ただ、あなたの神、主を恐れ、主のすべての道に歩み、主を愛し、心を尽くし、精神を尽くしてあなたの神、主に仕え、:13 あなたのしあわせのために、私が、きょう、あなたに命じる主の命令と主のおきてとを守ることである。」**、前回、私たちがこの箇所を見始めたとき、まず最初に考えたことは、この「神が要求されていること」を私たちが知ることができるようになることでした。それをしっかり理解し守って行くことができるようになるための鍵、その第一番目は、私たちが神との個人的な関係をもっているということでした。**「あなたの神」**、そこには個人的な関係があったのです。そして、二番目の鍵は、私たちが決して交渉することができない要求があるということをはっきり理解することでした。つまり、これら五つの神が私たちに求めておられることは、私たちが神の前に出て、私たちはこれをしなくても構わないでしょうか？と言うことができるものではないということです。絶対的な命令です。それをしなければいけないことを知っている、その鍵というものを考えた後で私たちは、神が求めておられる非常にシンプルな五つの命令を見たのです。

☆神が私たちに求めておられること

１．神を恐れる

いつも復習に時間をかけてなかなか先に進めないのですが、でも、一つだけ皆さんに話しておかなければなりません。もし、皆さんが神との個人的な関係をもっておられ、神がどのようなお方であるのかを、この聖書のみことばを通して明確に理解されるとするなら、皆さんは必ず、神の前にある健全な恐れというものを抱くはずです。もし、皆さんが神に対する恐れというものをもっていないとするなら、皆さんはもう一度みことばをよく読み直して、この方がどのようなお方であるのかを知らなくてはいけません。なぜなら、聖書の神は私たちが人間の友達として接することができるような「おはようございます」と気軽に声をかけることができるような方ではないのです。前回も話したように、もし、神がこの場におられたとするなら、私たちは交わりの時間に立って神のもとに行き手を差し出すようなことは絶対にできないのです。他の人たちと交わることもできなくなるでしょう。なぜなら、神の偉大さのゆえに私たちができることは、その場にひれ伏して神を崇めることだけです。それが私たちが信じる神の真の姿なのです。この方は王の王であり、主の主であり、その聖さとその栄光は、私たちを震え上がらせるものなのです。それゆえに私たちは、神を簡単に軽くあしらってはならないのです。私たちは神を恐れなければならないし、それゆえに、敬わなければならないし神の前にへりくだり、神が神であることを正しく認めなければいけないのです。これが神が私たちに最初に求めておられることです。ここから派生する私たちが考えなければならないことはたくさんあります。「神を神とする」、まず、神はそのことを私たちに求めておられるのです。

２．神に従うこと

モーセはここで**「主のすべての道に歩み」**ということばを使います。前回も話したように、最初にモーセが求めたことは、「主を恐れること」であり、それは心の態度のこと、内側の問題でした。ここで、その恐れ、内側の態度がいかに私たちの行動に現われるのかということをモーセは話しているのです。私たちが神を恐れる、そのような態度をもっているゆえに、どのような行動がそこから生まれて来るのか、どのような方向へと私たちの人生が進んで行くのかということをモーセは言っています。ここで言われる「歩む、歩く」というそのことばは、皆さんよくお分かりのように、人生の方向を示しています。人生そのものを語っていると言っても構いません。このことばはどのような原則に沿って、どのような道を歩んで行くのかということを表わすために使われているのです。ここでモーセが言っていることは、明らかに、あなたはどのような人生を生きていますか？ということです。あなたはどのような歩みをこの生涯において為して行きますか？ということです。そして、モーセが言うのは、**「主のすべての道に歩む」**ということなのです。つまり、神が私たち人間に求めておられること、私たち、神の民に対して求めておられることは、私たちがあらゆる分野において神の道を歩み続けることなのです。ここでモーセははっきりと**「主のすべての道」**と言っています。つまり、ある部分で主の道を歩むのではなく、ほとんどの部分で主の道を歩むのではなく、あらゆるすべての分野において主の道に歩むことを神は求めておられるのです。神が私たちに定めておられる、求めておられるその道を、私たちはあらゆる分野において生きて行かなければならないのだと言います。確かに、ここで語られていること、教えられていることは、私たちが神が実際に具体的に、これをしなさいと命じている命令を守ることと関連しています。神が求める道を歩むなら、私たちは神が求めていることを行なっているはずなので、命令を守るというその概念と深い関連がある訳ですが、モーセはここで明らかに、それとは別のことを話そうとしていることを見ることができます。なぜなら、５番目の要求が「命令を守る」ということだからです。

モーセは同じことを繰り返しているのではないのです。同じことばを使わずに、違う概念を言うことによってモーセはここで明らかに二つの事柄を分けています。「命令を守ること」というのはこの後出て

来ます。いつかそこに到達しますが、けれども、ここでモーセが言わんとしていることは、神が求めている、神のみこころに私たちが沿って歩んで行くというその人生を、私たちが生きるかどうかということです。私たちが神の知識に基づいて、神を正しく恐れるなら、その人は神がどのような方であるのかということに基づいた生き方をするようになります。そのことがここで言われているのです。イスラエルの民が王さまを求めた話を皆さんご存じですね？Ｉサムエル８：５で民はこのようなことを願っています。イスラエルの長老たちはサムエルに言います。**「今や、あなたはお年を召され、あなたのご子息たちは、あなたの道を歩みません。どうか今、ほかのすべての国民のように、私たちをさばく王を立ててください。」**、サムエルに対して**「あなたのご子息たちは、あなたの道を歩みません」**と言いました。ここで長老たちがサムエルに訴えたことは、サムエルがしたあらゆる一つ一つのことを息子たちが同じようにしなかったということではなく、サムエルが生きたような生き方をサムエルの息子たちがしていないということを言っているのです。つまり、モーセがここで私たちに対して**「主のすべての道」**を歩むようにと言っているのは、私たちが神が求めている一つ一つの命令をするかしないということではなく、私たちがどのような生き方をしているのかということです。神が私たちに求めている生き方、それは神が私たちに示す道を正しく歩んで行くことです。このことは、皆さんがよくご存じの箇所にも記されています。このみことばは皆さん覚えておられることでしょう。ミカ書６：８**「主はあなたに告げられた。人よ。何が良いことなのか。主は何をあなたに求めておられるのか。それは、ただ公義を行ない、誠実を愛し、へりくだってあなたの神とともに歩むことではないか。」**、これが神が人間に求めていることなのだとミカは言うのです。モーセは申命記の１０章で、６４００を超える命令を五つにまとめましたが、ミカはここで同じことを三つのことばで私たちに教えてくれています。神が人に求めているのは**「ただ公義を行ない、誠実を愛し、へりくだってあなたの神とともに歩むこと」**だと。ミカはここで**「主のすべての道に歩む」**ということばを**「へりくだってあなたの神とともに歩む」**ということばに置き換えています。なぜなら、神が求めておられる道は神が歩むことができる道であり、神がそこにおられる道であり、神の特徴に基づいた道であるからです。それゆえに、もし私たちがその道を歩むとするなら、私たちの人生は神の特徴に沿った人生へと変わって行きます。その歩みは聖いものとなり、その歩みは真実なものとなり、愛に満ちたものとなって行くのです。

神は繰り返して「わたしのような者になりなさい」と私たちに命じます。神はいろいろなことばを使って、イスラエルの民にもまた、私たちクリスチャンにも求めておられます。なぜ、それを求めるのかというなら、私たちが神が歩むように歩むことを求めておられるからです。神が生きるように私たちも生きることを求めておられるからです。神の特徴を現わして私たちがこの人生を生きて行くことを神は求めておられるからです。もし、私たちが神の民となったとするなら、私たちは神の特徴を現わして生きる者になったはずです。私たちの人生の方向は神の方へと向かっているものであり、神が定めた正しい道を歩んでいるはずなのです。なぜ、そう言い切ることができるのでしょう？皆さん、救われたときに悔い改めましたね、その悔い改めが本物であるとするなら、私たちは神の方向に向かって歩んでいなければおかしいのです。悔い改めというのは基本的に方向転換です。これまで私たちは、自分の好きな方へと進んでいました。神の道ではなく、自分の道を自分の好きなように歩んでいたのです。ところが、神の深い愛を知り、自分の罪を認め、キリストにある赦しを私たちが求めて、神の前にへりくだり悔い改めたときに、私たちは方向を転換したのです。それは単に方向を転換しただけでなく、１８０度変わっただけでなく、これまで歩んでいた道とは別の道へと歩み始めることです。今までは自分の喜びを満たす道を選択していたけれど、これからは神が喜ぶ道を選択するという者に変わったゆえに、神は私たちに「わたしの道を歩みなさい」と言って当然なのです。いやむしろ、神が求めている道を歩んでいないとするなら、そこに私たちの大きな問題を見つけることができます。神は明らかに、人々に対して、イスラエルの民に対して、先ほどミカ書で見たように、この申命記にもあるように、神の民イスラエルに対して、「わたしの道を歩みなさい」と言います。けれども、旧約聖書に記されているのと同じように、私たちクリスチャンに対しても同じようにこのことを求めておられるのでしょうか？

皆さんがよくご存じの箇所がそのことを教えます。たくさんの箇所があります。

Ｉヨハネ１：６－７　**「もし私たちが、神と交わりがあると言っていながら、しかもやみの中を歩んでいるなら、私たちは偽りを言っているのであって、真理を行なってはいません。:7 しかし、もし神が光の中におられるように、私たちも光の中を歩んでいるなら、私たちは互いに交わりを保ち、御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。」**

Ｉヨハネ２：６　**「神のうちにとどまっていると言う者は、自分でもキリストが歩まれたように歩まなければなりません。」**

ガラテヤ５：１６、２５　**「:16 私は言います。御霊によって歩みなさい。そうすれば、決して肉の欲望を満足させるようなことはありません。」「:25 もし私たちが御霊によって生きるのなら、御霊に導かれて、進もうではありませんか。」**

エペソ２：１０　**「私たちは神の作品であって、良い行ないをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行ないに歩むように、その良い行ないをもあらかじめ備えてくださったのです。」**
ピリピ３：１７　**「兄弟たち。私を見ならう者になってください。また、あなたがたと同じように私たちを手本として歩んでいる人たちに、目を留めてください。」**
コロサイ１：１０　**「また、主にかなった歩みをして、あらゆる点で主に喜ばれ、あらゆる善行のうちに実を結び、神を知る知識を増し加えられますように。」**
コロサイ２：６　**「あなたがたは、このように主キリスト・イエスを受け入れたのですから、彼にあって歩みなさい。」**
Ｉテサロニケ２：１２　**「ご自身の御国と栄光とに召してくださる神にふさわしく歩むように勧めをし、慰めを与え、おごそかに命じました。」**
Ｉテサロニケ４：１　**「終わりに、兄弟たちよ。主イエスにあって、お願いし、また勧告します。あなたがたはどのように歩んで神を喜ばすべきかを私たちから学んだように、また、事実いまあなたがたが歩んでいるように、ますますそのように歩んでください。」**

皆さんお分かりのように、新約聖書も繰り返して私たちクリスチャンに対して「歩くように」と言います。人生を生きなさいと言います。どのように生きるのでしょう？私たちが神が召してくださったその召しにふさわしく歩まなければいけない、イエス・キリストが歩んだその同じ歩みを私たちもしなければいけないと、そのように聖書は私たちクリスチャンにも求めているのです。この私たちが「歩む」ということが余りにも重要であるゆえに、パウロはエペソ人への手紙の後半をこの概念に費やします。エペソ人への手紙を開けて追っていってください。１－３章まで、パウロは私たちに与えられている救いがどのようなものなのかを具体的に示してくれました。私たちに救いの教理を一つ一つ教えてくれたのです。私たちがいかに、神によって選ばれ神の恵みによって救われ、私たちがいかにすばらしい祝福を受けているのかということを、パウロは明確にしてくれたのです。そして、４：１でこのように言います。**「さて、主の囚人である私はあなたがたに勧めます。召されたあなたがたは、その召しにふさわしく歩みなさい。」**、救いにふさわしく歩まなければいけない、このことばこそが、真にこのエペソ人への手紙の後半部分の強調点を私たちに示してくれているのです。**「召しにふさわしく歩みなさい」**と、それが私たちクリスチャンに求められている生き方であると。このような生き方というのは、神の子どもへと召された、救いへといざなわれた者たちにとって必要なものであり、絶対に不可欠なものであるとパウロは言います。それゆえに４：１７で**「そこで私は、主にあって言明し、おごそかに勧めます。もはや、異邦人がむなしい心で歩んでいるように歩んではなりません。」**と、今まであなたたちはこのような歩みをしていた、異邦人が歩んでいたような非常に虚しい歩みをしていたけれど、あなたたちは召されて主にある子どもとされたゆえに、もうそのような歩みをしてはいけない、その代わりに、主の召しにふさわしい歩みをしなければいけないとパウロは言うのです。神を神としない人たちが歩んでいる歩みをしない代わりに、どのような生き方をするのでしょう？５：１－２を見てください。**「ですから、愛されている子どもらしく、神にならう者となりなさい。:2 また、愛のうちに歩みなさい。キリストもあなたがたを愛して、私たちのために、ご自身を神へのささげ物、また供え物とし、香ばしいかおりをおささげになりました。」**、主の召しにふさわしく歩むなら私たちはどのようになるのでしょう？**「愛されている子どもらしく、神にならう者となり」**、それゆえに、**「愛のうちに歩」**むようになると言うのです。私たちがキリストにあって光の子どもとされたゆえに、５：８では**「あなたがたは、以前は暗やみでしたが、今は、主にあって、光となりました。光の子どもらしく歩みなさい。」**と言うのです。それゆえに、クリスチャンは自分の人生をどのように生きて行くのかに注意を払わなければいけないし、そのことにおいて賢い者として生きて行かなければいけないとパウロは言います。だから、５：１５で**「そういうわけですから、賢くない人のようにではなく、賢い人のように歩んでいるかどうか、よくよく注意し、」**、そして、パウロは勧めます。１７節**「ですから、愚かにならないで、主のみこころは何であるかを、よく悟りなさい。」**、賢くなって神のみこころをよく理解して、その内をしっかりと歩みなさいと。具体的に、どのようにすればそのような歩みができるのでしょう？パウロは１８節で**「また、酒に酔ってはいけません。そこには放蕩があるからです。御霊に満たされなさい。」**と勧めます。それが私たちが神のみこころをはっきり理解してその道を歩んで行くために必要なことだと言って残りの部分を使うのです。

パウロが私たちに訴えたいこと、エペソの教会に対して後半部分で最も訴えていることは、私たちがいかに主の召しにふさわしい歩みをするかということです。私たちがどのような生き方をしているのか？皆さんは救われた後、救われた者としてふさわしい歩みを生きていると断言することができますか？皆さんの人生は今、私はクリスチャンであると言うがゆえに、神の聖さと真実と義と、また、神の愛に特徴づけられたものとなっていますか？他の人が皆さんの歩みを見た時に「あの人は違う」と言われていますか？皆さんの生き方、歩みはこの世のものとは明らかに違うはずなのです。詩篇の１篇にもありました。神の前に祝福を受ける者たちは、悪者とはまったく違う生き方をしていたのです。皆さん

の人生はこのような歩みに特徴づけられていますか？皆さんが神を恐れ神を敬うがゆえに、皆さんが生み出して行くその歩みというのは、皆さんを召してくださった神の召しにふさわしいものとなっていますか？パウロがピリピ人への手紙に記しているように、皆さんはキリストの福音にふさわしい生き方をしていますか？それが、私たちが吟味しなければいけないことなのです。なぜなら、神が求めておられるのは私たちが内側において正しく主を恐れるゆえに、その歩みが主の前にあって神が求めるものになっているようにというものだからです。どうでしょう？皆さん、そのように歩んでいますか？聖い歩みを、神のみこころにかなった歩みを…、それとも、今までと変わらない自分勝手な生き方をして、神のすばらしさを反映することなく、その歩みを見て神がどのような思いをもっているのかを考えることなく、この世と変わらない生き方を続けていませんか？神は非常に単純なことを求めておられます。「わたしを恐れなさい、そして、わたしを恐れているのなら、恐れている者にふさわしくわたしの前に歩みなさい。」と。

次にモーセが私たちに求めること、一番目は「主を恐れること」でした。二番目は「主に従って生きること」でした。主の道を歩むことです。三番目にモーセが求めることは私たちが「主を愛すること」です。それが神が求める要求です。

３．主を愛すること

この「主を愛する」ということばは、１２－１３節の中で神が要求していることの頂点に置かれているように見えて仕方ありません。単に、五つの要求の真ん中に置かれている構成がされているというだけでなく、実際にこの原文を見ると、この五つの要求がこの「愛する」ということを頂点にバランスよく置かれているように見えるのです。事実、この「主を愛する」ということは、イエスが律法学者に「最も大切な命令とは何ですか」と問われた時に、一番最初にあげたことばです。「主を愛しなさい」、ここで使われている「愛する」ということばは、感情的な愛を示すために使われることばでもあります。ですから、このことばは例えば人と人とが愛をもって接する感情的な愛、愛情をもって接する、そのようなときに使われることばです。また、何か物事に愛を注ぐときにも使われることばなのですが、特に、このことばが神に対して使われるとき「神が愛する、神を愛する」といった意味で使われるときには、そこには単なる感情的な愛情以上のものが含まれています。ある注解者たちは事実、このことばが「愛」ということと同時に、実は「選び」ということの同義語であると言います。実際に、申命記を見ていても、私たちはこのことばと「選び」ということの関連性を見ることができます。例えば、申命記７：７－８にはこのように記されています。**「主があなたがたを恋い慕って、あなたがたを選ばれたのは、あなたがたがどの民よりも数が多かったからではない。事実、あなたがたは、すべての国々の民のうちで最も数が少なかった。:8 しかし、主があなたがたを愛されたから、また、あなたがたの先祖たちに誓われた誓いを守られたから、主は、力強い御手をもってあなたがたを連れ出し、奴隷の家から、エジプトの王パロの手からあなたを贖い出された。」**、「主が選んだ」ということと「主があなたがたを愛された」というのがほぼ同じ意味で使われています。神の選択というのは神の愛を現わすものであり、神の愛を反映するものであり、神の選びは神の愛によって私たちに表現されるものだからです。このように神がご自身の民を愛されたのと同じように、神は私たちが私たちの意志をもって神を愛することを求めておられるのです。なぜ、そのように言い切ることができるのか？よく考えてみてください。モーセはここで神がこのことを要求していると言います。つまり、「神を愛しなさい」と求めていると。皆さん、感情的にこの命令に従うことができますか？感情的に命令に従うことはできません。命令に従うか従わないかは、私たちが気持ちで感情で実践するものではありません。命令が与えられたときに、私たちがそれをするかしないかを決めるのは、私たちの意志、私たちの思いです。私たちが自分でそれをするかしないかの選択をするのです。神は私たちにそのようにして「わたしを愛する」という選択をしなさいと求めておられるのです。

けれども、いったい、どのようにこの愛は現わされるべきでしょうか？私たちはどのように神を愛するべきでしょう？いろいろ考えました、ひとつ、非常にすばらしい模範というものを見つけたと私は個人的に思っているのですが、それを皆さんといっしょに見たいのです。その愛情とはどのようなものか、それは、ルツが義理の母であったナオミに対して示した愛です。皆さんはこの話を知っておられますね？モアブ人の女ルツはナオミの息子たちの一人と結婚しました。けれども、ナオミの子どもたちは皆死んでしまい、彼女の夫も死んでしまいました。それゆえに、残されたナオミとルツ、ルツには選択がありました。ナオミは言いました「もうあなたが結婚できる相手は私から出てこないから、自分の地に帰りなさい」と。もう一人の息子と結婚していた同じモアブ人の女はこのことばを聞いて泣きながらモアブへと帰って行きました。けれども、ルツはナオミにすがりついて泣いてお願いするのです、「どうぞ私を去らせないでください」と。そして、ルツはこのように言いました。**「:16あなたを捨て、あなたから別れて帰るように、私にしむけないでください。あなたの行かれる所へ私も行き、あなたの住まれる所に私も住みます。あなたの民は私の民、あなたの神は私の神です。:17 あなたの死なれる所で私は死に、そこに葬られたいのです。**

もし死によっても私があなたから離れるようなことがあったら、主が幾重にも私を罰してくださるように。」（ルツ記１：１６－１７）と。それを聞いたナオミは、ルツを連れて生まれ故郷のベツレヘムへと帰って行くのです。ベツレヘムに着いてナオミはルツに様々なことを願うのですが、ルツはそのナオミのことばに従順に従い続けました。あらゆることに対して、ルツは熱心に母であるナオミに仕えたのです。３：５ではこのようなことばが記されています。**「私におっしゃることはみないたします。」**、これがルツがナオミの前にもっていた態度だったのです。ご存じのように、ルツはこの後ボアズと結婚します。そのボアズとの間にオベデという子どもができるのですが、その子どもが生まれた時に、イスラエル、ベツレヘムの女たちはナオミに向かってこう言います。ルツ記４：１４－１５**「イスラエルで、その名が伝えられるよう、きょう、買い戻す者をあなたに与えて、あなたの跡を絶やさなかった主が、ほめたたえられますように。:15 その子は、あなたを元気づけ、あなたの老後をみとるでしょう。あなたを愛し、七人の息子にもまさるあなたの嫁が、その子を産んだのですから。」**、ルツがナオミに何をしたのか、ベツレヘムの女たちはよく分かっていました。ルツはナオミのことを愛していたのです。ルツは故郷に帰ってもよかったのです。その方が彼女には人間的な幸いがあったでしょう。けれども、彼女はイスラエルの神を信仰し、ナオミに対する忠誠をもち、ナオミを心から愛していたゆえに、自分の願う、自分にとって有利な選択をするのではなく、たとえ、それが不利であったとしても、彼女を愛し、彼女に仕えることを心から願ったのです。そして、ベツレヘムにおいてナオミの求めることをすべて行ない、ナオミにとって七人の子、これはどれ程完全な子どもたちがいたとしてもということですが、この当時、息子がいることはすばらしいことだとイスラエルの人たちは思っていました。でも、それが七人いたとしても、完全な数だったとしても、その子どもたちよりも、ナオミにとってルツはもっとすばらしい女性ですと言います。なぜなら、ルツはナオミのことを愛していたからです。ルツはナオミにとって何よりもすばらしい祝福となったからです。ルツはナオミに対してものすごい献身をもっていたのです。どんなことがあっても私はあなたの所に行きます。あなたがいる所で私は仕えます。たとえそれが、自分が今まで一度も足を踏み入れたことのない土地であっても、イスラエル人たちがどれ程モアブ人を嫌いであっても…。律法の中にはモアブ人はイスラエル人の会衆に入ってはいけませんという命令が記されています。だから、ナオミはモアブの女性がイスラエルに来ることはしなくてもいいと言ったのです。それを分かっていながらナオミに対してルツは愛を示して従って行ったのです。なぜでしょう？愛していたからです。どのような犠牲を払ってでも自分の自由をすべて失ったとしても自分は愛するナオミに従って行きますと。この愛情、この献身、これが神が私たちに求めている愛です。

申命記６章で神はこのことをすでに私たちに教えてくれていました。申命記６：５にはこのように記されています。**「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。」**、求められていることは限界のない完全な圧倒的な、全身全霊をかけたその愛をもって愛しなさいということです。神の民はこの神を愛するゆえに、他の何よりも神との交わりを求める人たちです。神の民は神を愛しているゆえにその神のことばに耳を傾けたくてしようがない人たちです。神の民は神を愛しているゆえに、神の言っていることに耳を傾けるだけでなく、求められていることを心から行なって行きたいと願う人たちです。この全身全霊をかけた愛というのが、神の民をそのすべてにおいて支配しているものなのです。イエスはルカの福音書１４：２６－２７で**「わたしのもとに来て、自分の父、母、妻、子、兄弟、姉妹、そのうえ自分のいのちまでも憎まない者は、わたしの弟子になることができません。:27 自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしの弟子になることはできません。」**と言われましたが、これは親や兄弟を憎みなさいという命令ではないということは私たちはよく分かります。イエスご自身が親を敬いなさい、愛しなさいと求めているからです。ではなぜ、憎みなさいと言うのでしょう？神に対する愛とそれ以外のものに対する愛を比較するなら、神に対する愛は余りにも圧倒的、絶大的なものであるゆえに、それ以外のものに対する愛情というものはまるで憎しみにしか見えないと言うのです。それ程、神に対する愛というのは圧倒的な形で私たちを支配するものであるからです。ちなみに、この「神を愛する」ということに関しては、「新約聖書が私たちに本当に求めているのですか？」という質問を皆さんがしないことを私は知っています。新約聖書の中でも神は私たちが神を愛するようにと求めていることを皆さんよく知っておられますね？繰り返してそのことが記されています。神は今日においても、私たちが**「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして」**、私たちの力の限りすべてを尽くして神を愛することを求めておられるのです。事実、新約聖書の多くの箇所は、そのような愛をクリスチャンである皆さんがもっていることを前提として、その愛を実践して生きるようにと求めています。

けれども最後に「神に対する愛」について二つのことを皆さんにお伝えしたいと思います。

（１）私たちは神が先ず私たちを愛してくださることがなければ愛することができないということです。神が私たちをまず愛してくださらなければ、私たちは神をこのように愛することはできません。そのことは新約聖書においても旧約聖書においても同じように言うことができます。申命記３０：６でモーセ

は非常に興味深いことを語っています。**「あなたの神、主は、あなたの心と、あなたの子孫の心を包む皮を切り捨てて、あなたが心を尽くし、精神を尽くし、あなたの神、主を愛し、それであなたが生きるようにされる。」**、今、ここでモーセはだれが私たちが神を愛することができるようにすると言っていますか？神ご自身が私たちの心の包皮を切り取ってくださり、私たちが**「心を尽くし、精神を尽くし、」**、私たちの神、主を愛することができるようにしてくださるのだと言うのです。神がまず私たちを愛してくださったのです。ヨハネは新約聖書の中でまったく同じことを言いました。Ｉヨハネ４：９－１０、１９節にはこのように書かれています。**「神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちに、いのちを得させてくださいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです。:10 私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。」**、１９節**「私たちは愛しています。神がまず私たちを愛してくださったからです。」**、神が私たちを本当に愛してくださったのにそのことを知ることがなければ、私たちは神を愛することはできません。神が求める生き方を私たちがして行きたいと思うなら、最初に話した鍵のところに関係があります。私たちは神との個人的関係をもっていなければならないのです。それがなければ、神を愛すること、神を恐れ神に従って生きて行くことは不可能なのです。神がまず私たちを愛してくださったから、そのすばらしい選びを、そのすばらしい選択を私たちが理解し、何とすばらしいみわざを、私たちが受けるにふさわしくないわざを神が為してくださったのか、そのことを私たちが理解するなら、私たちはルツがナオミに仕えたように神に仕えたいと思うはずです。どんなことがあったとしても、こんな偉大な、こんなすばらしい恵みを与えてくださる神に「私は仕え続けて行きます。この方を愛さずにいられるでしょうか」と言います。だから、私たちは考える必要があります、本当に私たちはこの方に愛されているかどうか、その愛を受けた者なのかどうかと。その愛を知ったゆえに神を心から愛する者かどうかを考えなければいけないのです。

（２）神が私たちを選んでくださったゆえに私たちは神に対する愛に燃えているはずが、その愛が冷えることがあるとイエスは言います。イエスはオリーブ山の説教の中で非常に興味深いことを言います。マタイ２４：１２、ここではイエスは患難時代の話をしていますが、ここで非常に興味深いことばが記されています。神が私たちを選んでくださったゆえに私たちは神に対する愛に燃えているはずですが、その愛が冷えることがあるとイエスは言われるのです。**「不法がはびこるので、多くの人たちの愛は冷たくなります。」**、この短い文章の中に非常に重要な意味合いを私たちが見ているこのトピックの中でもっています。ここで言われていることは、どうして愛が冷えたのかその理由を伝えています。それは**「不法がはびこる」**のだと言っています。**「不法」**、それは単に悪が行なわれているということだけでなく、神の求めていることを正しく認識することに欠けた人たちのこと、欠けた状態のことです。それが起こる時に、神に対する愛が冷めて行くのだと言います。神に対する愛は何によって示されるのか、それは神を喜ばせる生き方によって現わすことです。神に対する献身によって現わされます。義の生涯によって現わされて行くのですが、人々が**「不法」**に取り囲まれているとき、その義の生涯が次第に見ることができなくなって行くというのです。この２４章の文脈は本当のクリスチャンのことではありません。愛が冷めて行くのは真のクリスチャンのことではないのです。愛が冷めて行くのは、私はクリスチャンである、私は救われている、私は神の民だと口では言っている人たちのことです。なぜなら、本当のクリスチャン、神の民は、愛が冷めることはないからです。けれども、告白だけしかない人たちというのは**「不法」**の中に取り囲まれているときに、その義の生き方を止めて行くのです。１３節を見てください。だから、言います**「しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われます。」**と。つまり、愛が冷めていって最後まで堪え忍ぶことがない人たちは救われないのだと言っているのです。私たちは注意深くこのことを考えなくてはいけません。黙示録の中でイエスはエペソの教会に向けて何と言いましたか？**「しかし、あなたには非難すべきことがある。あなたは初めの愛から離れてしまった。」**、教会の中にいた多くの人たちが神に対する正しい愛をもっていなかったのです。教理的には正しい教理を持っていたでしょう。見た目ではすばらしい大きなクリスチャンたちに満ちた教会だったかもしれません。けれども、イエスは言うのです、「あなたたちには一点だけ非難する所がある。初めの愛から離れてしまった。」と。つまり、教会の中にはたくさんの正しく神を愛していない、神の愛を正しく知らない人たちがいたのです。

この世は神を愛しません。神ではなく闇を愛します。罪を愛します。それゆえに、罪の行ないを続けるのです。でも、神を愛する者たちは、闇ではなくて、神を愛するがゆえに、神が喜ぶ行ないをし続ける者であるはずです。だから、ヨハネはＩヨハネ５：３でこのように言いました。「**神を愛するとは、神の命令を守ることです。その命令は重荷とはなりません。」**、なぜ、重荷とならないのですか？私たちが神を愛しているからです。喜んでそれをしたいと願うからです。余りにも多くの人たちが不法に満ちた世の中において、神の前に正しいことをすることに疲れ果ててしまっています。私たちは多くの場合に余りにも神に対する愛情に怠惰な者になってしまっています。余りにも多くの他の事柄が神の愛と競い合うようになってしまっています。余にも多くの者たちが初めの愛から離れてしまっています。皆さん、どう

ですか？神は言われます。「あなたは愛さなければいけない、わたしを愛しなさい。あなたの全身全霊をもって他の何ものよりもわたしを愛さなければいけない」と、そのように神は求めておられます。あなたは神をそのようにして愛しておられますか？神は私たちに「神を恐れなさい」と言われます。神は私たちに「神の道を歩みなさい」と言われます。そして、神は私たちに「神を愛しなさい」と言われます。

もし、私たちが自分自身を神の民であると呼ぶとするなら、これらの要求は交渉できないものであるということを覚えておかなければいけません。それゆえに、私たちはその要求をもって自分自身を吟味しなければいけません。本当に、私は神の民であるかどうかと。神は偉大な方であるから私たちは恐れるのです。神の道は完全であるゆえに私たちはその道を歩きたいと願うのです。神は私たちをすばらしい愛で先ず私たちに対してこの愛を示してくださったゆえに、私たちは愛をもって答えようとするのです。神が求めることは難しくありません。複雑なことではありません。旧約聖書の博士号を持っていないとその意味が分からないというのではありません。神を恐れることもシンプルだし、神の道を歩むこともシンプルだし、神を愛することも難しい要求ではないのです。問題は私たちがそれを心から理解して実践して行こうとしているかどうかです。難しいのはそこです。どうですか皆さん、「やります！」それが神が皆さんに問いかけていることです。